

TOPICS

各地で阪神・淡路大震災
報告会開かれる

□ 神戸大学で報告会

神戸大学工学部建設学科土木系教室および工学部付属土地造成研究施設では、阪神・淡路大震災発生2日後の1月19日、有志の教官による学術調査団を結成して被災状況を調査し、詳細かつ正確な被災記録を残すことを決定した。このような被災直後の綿密な記録を残すことは、被害を受けた地元の大学の責務と考えたためである。神戸大学兵庫県南部地震学術調査団（代表：高田至郎教授）では第1次調査を1月末までに終了し、調査成果を第1次報告書（全81頁）としてまとめて報告会を2月18日（土）に神戸大学にて開催して、地域住民をはじめ研究者・行政関係者まで400人以上の参加を得た。その後、第2次、第3次調査



が実施され、その成果を第2次報告書（全301頁）にまとめ、4月9日（日）に第2次報告会を実施した。いずれの報告会も不便な交通事情にも関わらず、大盛況であった。なお、詳細な被災調査結果は地理情報システムとしてパソコン上のデータベースシステムに登録され、被災原因の究明や今後の復興計画に活用されることとなっている。

（神戸大学助教授 工学部建設学科 田中 泰男）

□ 愛知工業大学で震災シンポジウム

愛知工業大学は、震災シンポジウム—阪神大震災に学ぶ—を、3月3日および4月24日の2度にわたって開催し、いずれも名古屋・東海テレビ



のテレビア・ホールを埋める約500名の参加者を得た。講師は、地震学の飯田汲事教授をはじめとする土木工学科、建築学科、建築工学科の7名の教員と作家の藤本義一氏であった。シンポジウムの特徴として、①名古屋地区で大地震があったらどうなるのか、という住民が切実に知りたいテーマを取り上げこと、②最多忙期に時間をやりくりして現地に赴いた教員の生々しい調査報告をかなり早い時期に行ったこと（第1回は当地区の土木学会第1回震災報告会の4日後）、③土木構造物・建築物の一般的な被害報告に加えて、「小・中学校の被害状況と地域防災における学校の役割」「障害者、お年寄りのための対策」など特別のテーマについて報告があったこと、④専門外の被災者として、鋭い観察力を持った小説家である藤本義